

Title	Hammond. N. G. L. and Scullard. H. H. (ed.), The OXFORD CLASSICAL DICTIONARY
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.2 (1972. 1) ,p.97(233)- 101(237)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のあらましを先生はかえりみて「あとがき」にしたためられ、本書を夫人にささげる献辞をもって結んでおられる。まことにゆかしくも、うるわしく、いよいよ清栄を願ってやまない次第である。それと、本書の刊行に助力を惜しまなかった方々の労に対しても、あわせて大いに多としたい。(四六、三、一四)

Hammond, N. G. L. and Scullard, H. H. (ed.)

The OXFORD CLASSICAL DICTIONARY

Oxford Clarendon Press, 1970 2ed. \$6. 30.

真下 英信

古典時代と一般に呼ばれている古代ギリシア、ローマに関心を持つ人々にとっては、専門家であろうと素人であろうと或いは関心分野が文学であれ歴史であれさらには科学史であれ、何らかの古典辞典を座右に置く事が絶対に必要なのは改めて言うまでもあるまい。何か本を読んでいる時、不明な項目が出て来てもそれが少し特殊なものであると大体普通の辞典類には記載されていない。図書館に行って大辞典を調べればすぐに解る事は知っている。しかし「我々」凡人は大概「後で」と考えて放って置く。そしてそのまま忘れてしまうものである。

こうした時に自分の手本に辞典を持っておれば、しかもなるべく多くの種類の辞典を持っていればいる程、図書館に行く途中の道路の混雑を心配したりする事なく唯手を伸すだけか僅か二、三

批評と紹介

歩往復四、六歩で容易に調べることが出来るのである。いわば、手を出すだけで幾千年もの昔の世界に入れるのである。この事はさらに、古典文化をその母胎としていっていると云われているヨーロッパ文化に関心を懐いている人々にとってもその研究分野の如何を問わず言えよう。詳細な点はともかくとして、古典文化は周知の如くヨーロッパの精神生活の一つの大きな礎石を形成しているのである。

こうした歴史を背景にしてであろうか、ヨーロッパでは特に十九世紀以来多くの辞典が編纂されており今日でも又大小様々の形で出版されている。例えば古典辞典と言えはすぐに誰れでも思い出すのは、Pauly の書を基に、Wisowa, Kroll それから Ziegler など多くの編者による、十九世紀末以来未だに続刊中のドイツの辞典編纂の真髓を示していると言える *Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft* である。本書はしかしながら辞典と言っても、しばしば膨大な論文の如き「解説」があり、Hight. G. も述べているように文中にむやみと引用や注釈それから略号が挿入されており読みにくくその上「悪文」ぞろいでもとも一般向きとは言いがたい。

他方小辞典の方はどうかと言えは、ペーパーバックのものを始めとして実に無数と言って良い程の種類が出版されている。これらの内で、Harvey P. The Oxford Companion to Classical Literature などは題名から推定されるように少し内容は特殊なものだが、簡潔で大変読みやすく便利である。しかし、本書に

(一三三)

九七

は出典や研究書が記されていない欠点がある。

こうした中で手頃で研究書も記載されており初学者にすこぶる便利ないわば *via media* を行く *OCD* は一九四六年に第一版が出されてから広く各層の人々の間で好評を博し利用されてきた。そして、このたび一九六四年以来多くの研究者の協力を得て、ギリシア方面では Hammond N. G. L. ローマ方面では初版の編者の一人でもあった Scullard H. H というギリシア、ローマその各々の分野で今日第一の人が責任編集者となってようやく本書の第二版が上梓された。本日丁度この二版が入手出来たので、自己の力の螻蛄の斧たるを省みず敢へて本書を組上に載せたしだいである。

ところで、今回の改版の大きな理由の一つは初版以来二十年の間になされた発見、研究の成果を取入れる事であった。第二次世界大戦後今日までに幾多の発掘活動に依り新しく遺跡が解明されたり、或いは新しい史料が発見されている。そして今日、これらの研究成果を基にして多くの方面に渡って学説の変化や史料の再評価が行なわれている。こうした状況にあつては、従来の見解をそのまま記載しておくのは辞典としての利用価値、特に本書のように入門書性格を持った辞典の役割の底下をもたらしたのであつた。

改訂理由の第二は、第一の理由とも関係するのであるが、こうした最近の研究に依つて古くなつた各項目の末尾に記されている関連文献史料を全面的に書換え、最新の文献を読書に提供しようとする点であつた。初版では文献史料は可成り良く選択されてい

るのもあつたが、同時に極めて粗雑な機械的なのがないわけではなかつた。この点今度は大變改良されている。この事は史料だけでなく各項目の記載内容についても全く同じであり、初版に見られた舌足らずの項目はずっと少なくなつてゐる。ただ一つ気がついたのは、文学、史学、哲学の項目がありながら科学についての一般的な項目がない点である。こんな事を述べるのはない物ねだりの感がないでもないし、又頁数の関係上やむをえなかつたのかも知れない。しかし古代科学は哲学や文学に劣らず極めて重要な項目として考えても良いのではないか。次の第三版にはぜひ取入れてもらいたい所である。

なおつけ加えておけば、参考文献は一九六八年までのものが引用されている。又誤植はないわけではないが、この種の辞典としては完全であると言つて良いのではなからうか。

装いを新にした本書を初版本と比較してみると、全体としての構成は同一で各項目には筆者の署名と関係文献が附されているが、二版が全頁数一七六となつていて二〇〇頁以上も増補されているのにもかかわらず紙質や印刷の改良によつてずっと小型化し又見やすくなつてゐる。さらに今回は本文の項目中に含まれていない事項や関連事項の索引が巻末に二十頁以上にわたつて加えられていることは本書の利用価値を一層高めたと言えよう。一見してみても、Arch とか Arethusa という面白い項目がすぐ目に附く。なお執筆者は初版と同様に英国を代表する古典研究者を中心とする人々である。

次に各項目別に見ると、改訂された点は大きく分類すると次の二点が指摘されよう。

一つは初版と同一の項目でありながら内容は全面的に書改められたもので、これは性質上考古学方面の項目に著るしく第二版の中で最大の改訂が行なわれている。その代表的な例として、シュリーマンのトロイ発掘の成功にも比較される一九五三年の M. Ventris の線文字 B の解読によってこの二十年間たらずの間に急速に発展した「シケーナイ学」に関する項目が指摘されよう。“Mycenae”の項目はこれら一連の最近の研究成果に基づいて大幅に書換えられておりその上さらに“Mycenaen Civilization”の項目が新に加えられている。“Mycenae”では初版の様なシケーナイの概略的な説明ではなく、EH, MH, LH と時代ごとにその歴史が城砦の変化などと関係づけながら考古学の研究成果を駆使して簡潔ながら明瞭に記述されている。さらにこのシケーナイのいわば黄金時代から幾何文様時代、古典時代、そして紀元後二世紀 Pausanias がここを訪ずれた時は僅かの羊飼が住んでいるにすぎなくなってしまうまでの長い歴史がうまくまとめられている。又“Mycenaean Civilization”では一層広く詳細な解説がなされている。シケーナイ文明盛衰の歴史を始めとして、宮殿の構造、当時の美術や技術、手工芸品、陶器それから線文字等種々な面がのべられている。線文字 B についていえば、この文字はギリシア語、従がってシケーナイ人はギリシア語を話していたインド・ヨーロッパ人であったとする代表的な見解がのべられている。

批評と紹介

ところでこの線文字 B から我々ほどのような政治的、宗教的或いは社会的な特質を持った所謂シケーナイ社会を考へることが出来るのであろうか。この点は今日でも学界で盛んに議論されているが B 文字の史料の性質が特殊な為、明確な全体的社会像は今日なお模索中というのが現状である。しかし大体確実に言えるところ多数の学者が認めているシケーナイ社会の全体像は如何なるものか、著者は大変簡潔にまとめていたのでここに引用しておこう。

The political regime at Pylos and Crossos was an autocratic monarchy with a centralized, bureaucratic administrative system. The *wanax* exercised supreme authority. Next to him was the *lawagetas*, 'the Leader of the Host', who, like the *wanax*, was given a *temenos*, a slice of land, as a prerogative of his office. Below these we find a number of officials major and minor—*tereta*, *egeta*, *korete*, *porokorete*, *gasiren*, *moroga*, etc.—whose duties, prerogatives, and relative positions remain uncertain. Land was held by the *wanax*, by individuals, and by the *damos*, the community, and a well-established system of land tenure existed at Pylos. There was a special class of priests and priestesses; artisans were divided into well-defined classes, and slaves were numerous. Whether this political system prevailed at Mycenae, Athens, and Thebes cannot be determined as yet, but their Cyclopean

walls and palaces may indicate their rulers' great authority.

同様な変化はクレタ文明の解説にもみられ初版では僅かに“Cnossos”“Minoans”の項目でのべられたにすぎなかったが、二版では“Minoan Civilization”“Minoan Scripts”の二つにまとめ大幅に増補されている。すなわち、シケーナイ文化と同じくミノア文化の全時代を概観すると同時に宗教、宮殿、家屋や墓等について項目別に一層詳細な解説を附している。なお、クノッソス宮殿の最終的な崩壊年代については従来学界でかならずしも定説化したわけではないが割に多くの人に依って Evans の 1400 B. C. 説が支持されて来ている。しかし著者 (M. S. F. Hood) はこの年代は三〇年位引下げた方が正しいと考えている。

こうした変化は新しいパピルスの発見に依り一九五九年に始めて完全な史料として出版されたメナンドロスの喜劇にみられるように、パピルス史料に基づいた項目にもみられる。又“Delian League”の項目も初版では極めて簡単に扱われていたにすぎなかったが、今回は多くの碑文研究特に Athenian Tribute Lists 等の研究成果を取入れて初版の五倍以上のスペースをさいて記述されており、同盟の性格、アテーナイ帝国への推移過程、ペリクレスの政策と同盟国の関係、アテーナイの内政及び外交特にスパルタや同盟諸国との政治的軋轢等が詳細に論じられている。

この他にも多くの項目において大小種々な変化が見うけられるが、個々の実例を挙げるいとまはないのでこの点は割愛する。只、

一例だけを述べれば、“Solon”の項を見ると彼のアルコン年代のように従来半かば定説化されていた見解に対しても筆者の微妙な態度の変化が認められる。

第二の改訂点は初版にはない全く新しい項目が多く取入れられている事で、特にキリスト教に関係する項目に比較的多くみられるようである。例えば、従来の“Gnosticism”は全面的に書換えられている上に、“Christianity”が六欄近くにわたり記述されているのを始めとして、“Donatist”やニッサの Gregory を始めとして四人の Gregory, やらに“Vulgate”等の項目が入っている。こうした点は初版の内でも最大といえる欠点の改良であり、二版はキリスト教に関心を持つ読者にとっても極めて有益なものとなり、同時に本書の利用価値を倍加したものと云えよう。

この外に新たに項目として附加えら内では、地名が比較的多くみうけられる。この点は特にローマ史方面に著るしく Cappadocia, Nisibis 等幾多の地名が新たに採用されている。ギリシア方面に関していえばこれ又際限がないが、アッティカについて述べると、Brauron, それからメナンドロスの唯一の完全なテキストである Dyskolos の舞台となつてゐる Phyle などがみられる。

以上無味乾燥な事ばかり述べて来たが、本書には神話や陶器の絵などで我々にも馴染深いディオニソス、Sirens, ラオコン、或いはシェイクスピアにも作品の素材として用いられているピラモスとティスベ、ヴァーナスとアドニス等ヨーロッパ文学に関係の深い項目が多く所収されている外、子供も知っている謎々で有名

なスフィックスの歴史も本書を繙くことによって知ることが出来、暇にまかせて読んでも大面白く辞典である。

とまれ簡約にして網羅的な本辞典は古典に関心を持つ人々のみか、紫の煙をくゆらせながら、或いはキオスの葡萄酒をかたむけながら「荒地」や「ヒュペリーオン」を読む人々にとっても又極めて有益かつ便利であることは確かである。

Kurt Klotzbach, *Das Eliteproblem im politischen Liberalismus—Ein Beitrag zum Staats- und Gesellschaftsbild des 19. Jahrhunderts,* Köln und Opladen, 1966.

東 畑 隆 介

最近の西独史学の一つの傾向として、政治学や社会学で使用される概念を適用した政治史や政治思想史の多いことが挙げられよう。これは、曾て、シーダー、コンツェ、ヴァーグナーなどによって主張された歴史学と社会科学との協力が単なる理論的な要請から具体的な適用の段階へと進んだことを意味している。ここに紹介するクロッチュバッハの書物も、このような現代西独史学の傾向を示している。著者は現代史の大家ブラッヒャー教授の門下で、一九六五年の夏学期にボン大学哲学科に提出した学位請求論文をもとにして、本書を執筆したとのことである。

批評と紹介

次に本書の内容であるが、本書は「問題」と題する序論と一、「国家と社会間の闘争における財産エリートと教養エリート」二、「自由主義市民階級の政治的観念の世界におけるエリート」三、「決戦に際してのドイツ自由主義」四、「自由主義と政党」五、「平等の大衆の時代の開始に際してのエリートの自由主義の権利の要求と弁明」六、「ドイツ自由主義の悲劇のなかでのエリートの問題」などの六章及び「結論」から成っている。

以下、順を追って本書の内容を紹介することにする。

先づ序論においては、「エリート」という概念の理論的考察が試みられる。著者は、従来の社会学や政治学におけるエリートの問題の中心は最高の社会的、政治的権力の行使の問題であったと述べ、パレート、ミヘルス、モスカなどのエリート理論を検討した後、「エリート」の特性表示のためには、最高の権力を行使する階級という概念以上のものが必要であり、「社会、国家、国民の特定の集団に「エリート」という称号を授けるためには、社会的諸関係や諸価値のより包括的な観念、政治的諸要素や諸衝撃のより広範囲の基礎を必要とする」と述べている。次に身分、階級、エリートの相互関係について、身分社会における政治・社会権力の基礎が「名誉」や「社会的評価」であり、階級社会の指導階級の支配の基礎が財産関係であるのに対して、「エリート」を特色づけるものは、「国家的もしくは社会的全体への責任及びそれへの放射と関連する能力ある業績の概念(der qualifizierte Leistungsbegriff)」であり、このようなエリートの標識は、身分や